

植田弥生\*：三方低地帯中部，北寺遺跡出土の完新世後期木材化石群

Yayoi UEDA \* : Late Holocene wood fossils obtained from the Kitadera Site in the middle part of the Mikata lowland along the Japan Sea

若狭湾沿岸の三方低地帯には、三方断層の活動にともなう西側の全般的な沈降(岡田, 1984)によって、鳥浜貝塚をはじめとする縄文時代以降の遺跡群が多数埋没しており、埋没林をともなう木本泥炭もしばしば見出されている。1990年6月に三方町教育委員会によって発掘調査された低地帯中央部西縁の北寺遺跡もその一つで、小区画のトレンチ発掘ではあったが、泥炭層からはまとまった木材化石群を得ることができた。小論では木材化石群の産状と樹種同定の結果を報告しておく。なお、本遺跡の発掘調査の考古学的な成果や付随する自然科学的調査の詳細は、別途発掘調査報告書で記載されることになっている。調査の機会を与えられ、試料採取その他に協力いただいた三方町郷土資料館の田辺常博・青池晴彦両氏に感謝します。

北寺遺跡は、三方市街から西方に広がる高瀬川低地の北西縁に位置する(北緯 35° 32' 53", 東経 135° 53' 28", 地表の標高約 5 m)。約 500 m 北東に牛屋遺跡(植田・辻, 1990)が、さらにその約 750 m 東に著名な鳥浜貝塚が位置する。本遺跡では低地縁辺の6か所において2×4 mのトレンチ発掘が実施されたが、そのうち木材化石を産出するF42とF44の2トレンチについて試料採取を行った。

トレンチ壁で観察された堆積物の厚さは約 1.5 m で、上位より A~E の5層に便宜的に区分された(Fig. 1)。E層は褐灰色の木本泥炭からなる。D層は褐色草本あるいは木本泥炭からなるが、F42トレンチの下部では砂礫が卓越する泥炭質堆積物となる。C層は灰褐色泥炭質堆積物からなり、細・中礫を一様に含む。B層は灰色ないし灰褐色の泥炭質泥からなる。A層は砂礫が目立つ灰色泥からなる現在の水田耕作土である。F42トレンチではE層とD層の間に貝塚貝層が部分的に挟まる。F42トレンチはF44トレンチに比

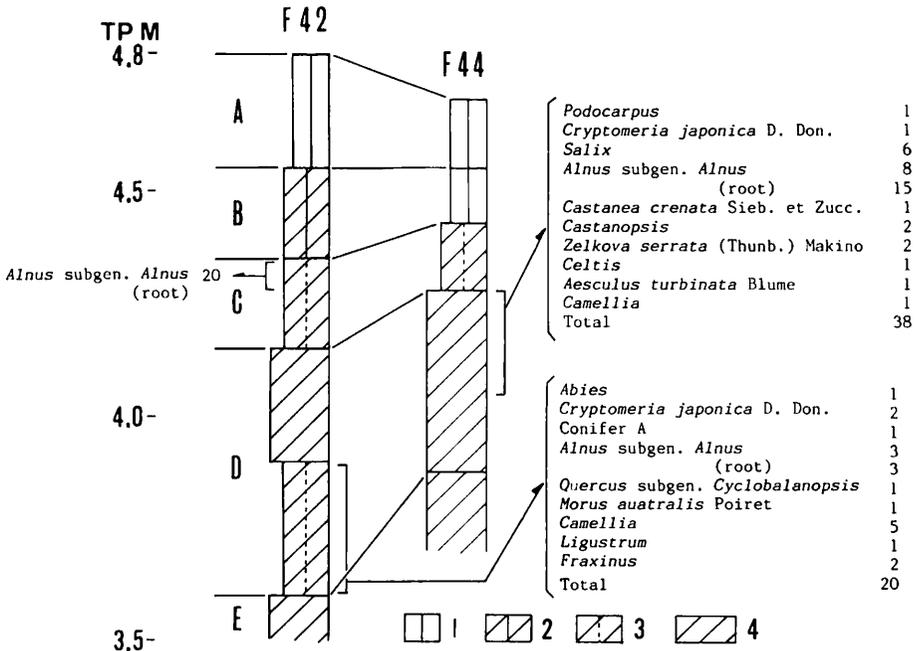


Fig. 1 Columnar sections of two trenches investigated and the list of wood fossils and their number of specimens obtained.

較して砂礫が卓越する傾向がある。産出した考古遺物は現在整理中であるが、田辺常博氏によれば、E層・D層からは縄文後期前葉から中葉の土器が、C層からは縄文後期中葉の土器が集中することがほぼ明らかになってきた。

木材化石の樹種同定用の試料は、F 42 トレンチではC層上部とD層下部の2層準、F 44 トレンチではD層中・上部の1層準から採取した。したがって、いずれも縄文時代後期の遺物包含層から採取した。D層の木材化石は直径1~3 cmの小さいものが大半であったが、直径80・50 cmの幹材や直径10~20 cmの幹あるいは枝材も稀に産した。C層の木材化石はすべて下方へ延びる根で、直径2~6 cmのものが多く最大は35 cmであった。木材組織プレパラートは剃刀で横・接線・放射断面の3方向切片を切り取り、ガムクロロールで封じて作成した。試料およびプレパラートには標本番号YW-394~473(欠番421・424)を記し大阪市立大学理学部生物学教室に保管してある。

樹種同定の結果はFig. 1にまとめて示した。D層とC層の木材化石の樹種構成には明瞭な違いが認められる。すなわち、C層からの木材化石群はすべてハンノキ亜属の根材に同定されたのに対して、D層からの木材化石群はハンノキ亜属の根材を含むものの複数の分類群が含まれ、スギ・モミ属・マキ属といった針葉樹、ヤナギ属・ハンノキ亜属・クリ・ケヤキ・エノキ属・ヤマグワ・トチノキ・トネリコ属といった落葉広葉樹、アカガシ亜属・シイノキ属・ツバキ属といった常緑広葉樹と種類が多岐にわたる。これらのうちマキ属やアカガシ亜属などの常緑広葉樹は暖温帯性の種属とみなせるものである。イボタノキ属は常緑性が落葉性のどちらであったかは今のところ判別できない。

上記のようなD層とC層の木材化石群の組成上の差異は、堆積環境の変化を反映したものと考えられる。すなわち、D層の木材化石群はハンノキ亜属以外の分類群については根材が産出することがないので、堆積域縁辺か山地斜面に由来するとみられるが、C層およびF 44 トレンチにおけるハンノキ亜属は多数の根材を随伴するかそのみからなるので、ほとんどすべてが堆積域に生育していた母植物に由来するであろう。C層・D層いずれの場合でも注意を要するのは、根材で産出した母植物が包含層より上位層準に生育していた可能性があることである。したがって、ハンノキ亜属が本遺跡の堆積域に生育していたのはD層上部の堆積期以降、B層堆積以前ということになる。

当遺跡から約500 m北東の牛屋遺跡では、放射性炭素年代および考古遺物から縄文時代中・後期にあたるとみられる泥炭層と弥生時代中期とみられる泥炭層が確認された(植田・辻, 1990, 辻ほか, 1991)。植田・辻(1990)によれば、下位の縄文時代中・後期の泥炭層からはスギ・トチノキ・カエデ属の立株・根材のほか多数の加工木が産したが、樹種構成は北寺遺跡の木材化石群と著しい類似をみせる。また、上位の弥生時代中期の泥炭層からは堆積域縁辺か山地斜面に由来する多数の木材化石を産するが、現地性を示すハンノキ亜属の根材も産出し、北寺遺跡のD層上部やC層にみられる産状との類似性が認められる。これらのことは、縄文時代中・後期に低地から山地にかけて照葉樹林要素など種組成に富む森林植生が広く成立していたこと、および縄文時代終末期から低地が水田耕作に利用されるまでハンノキ亜属が低地縁辺に侵入していたことを示唆している。もちろん、それらが巨視的にみてどのような景観をかたちづけていたのかは、一層広い面積にわたる資料を待つて議論されるであろう。

## 引用文献

- 岡田篤正. 1984. 三方五湖低地の形成過程と地殻運動。「鳥浜貝塚1983年度調査概要・研究の成果—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査4」, 9-42. 福井県教育委員会・福井県立若狭歴史民俗資料館。
- 辻 誠一郎・植田弥生・鈴木三男・能城修一. 1991. 牛屋遺跡と周辺のご環境。「角谷遺跡 仏浦遺跡 江端遺跡 牛屋遺跡」, 127-136, 図版31-38. 三方町教育委員会。
- 植田弥生・辻 誠一郎. 1990. 福井県三方町牛屋遺跡から出土した弥生時代以降の木材遺体群. 植物地理・分類研究, 38: 43-50.

(\*〒558 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪市立大学理学部生物学科 Department of Biology, Faculty of Science, Osaka City University, Sugimoto, Sumiyoshi-ku, Osaka 558, Japan)